高等学校日本史における基礎的・基本的な歴史的事象の習得を図る授業づくり

-「教えて考えさせる授業」と「ICE モデル」の考え方を取り入れて-

学籍番号　179981
氏　名　山本　恭嗣
主指導教員　中西　修一

1．背景・目的

本教育実践研究の研究背景には、主に①学校教育法、②学習指導要領、③日本学術会議、④大学入試改革、⑤実習校の現状の 5 点がある（①～④は 1.1、⑤は 1.2 に記載）。基本学校実習Ⅱでは、③及び④から「歴史的思考力」の育成を重視し、「歴史的思考力の育成を図る授業づくり」を行うことを研究目的とした（第 3 章）。その後、基本学校実習Ⅰ・Ⅱを振り返り、⑤を重視し「知識の習得」へと転換した。その結果、発展課題実習Ⅰ・Ⅱでは、「基礎的・基本的な歴史的事象の習得を図る授業づくり」を行うことを研究目的とした。（第 4・5 章）。

2．基本学校実習Ⅱ

基本学校実習Ⅱでは、「歴史的思考力の育成を図る授業づくり」を行うことを研究目的とし、歴史的思考力の定義を「過去と現在の相違とともに過去から現在に到る変化を認識する力」とした。その上で、歴史的思考力の育成に向けて、授業プリント内に授業内容について考えさせる問いの設定や「過去と現在との相違」を認識させるために視覚的資料の提示などの取り組み・工夫を行った。

これらの取り組み・工夫により、歴史的思考力の定義に沿うような記述を一部生徒から引き出すことができ、歴史的思考力の育成を図ることができた。

3．発展課題実習Ⅰ

発展課題実習Ⅰでは、基本学校実習Ⅱでの課題や実習校の授業シラバスを踏まえ、「高等学校日本史における基礎的・基本的な歴史的事象の習得を図る授業づくり」を行うことを研究目的とした。この研究目的を達成するために、市川伸一氏の提唱する「教えて考えさせる授業」（市川、2008, 2017）を取り入れ、授業実践を行った。

この成果としては、事前・事後テストの結果を読み取ると、出題した歴史的事象について習得を図ることができた生徒がいた。このことから、筆者の行った授業実践により、基礎的・基本的な知識の習得を図ることができたと判断できる。一方、課題としては、筆者自身が「教えて考えさせる授業」についての理解ができておらず、「教師からの説明」「理解確認」「理解深化」「自己評価」のうち「教師からの説明」「自己評価」の部分的な実践に留まったこと、検証方法である事前・事後テストの間に差が生じたことがある。

4. 発展課題実習Ⅱ

発展課題実習Ⅱでは、発展課題実習Ⅰと同様の研究目的としつつも、発展課題実習Ⅰでの課題の解決のために、「ICE モデル」（土持、2013,柞磨、2017）の一部を取り入れることとした。発展課題実習Ⅰとの違いは、下記表の通りである。

	授業の基本的な流れ（左から右へ進めていく）			
発展課題実習Ⅰ	教師からの説明	理解確認	理解深化	自己評価
発展課題実習Ⅱ	教師からの説明	Connections フェーズ	Extensions フェーズ	

授業実践の前後に、筆者が行った事前・事後テストの結果からは、有意差がみられた。また、事前・事後テストを分析した結果、筆者の授業実践により、出題した基礎的・基本的な歴史的事象については、その習得を図ることができた生徒がいた。このことから、筆者の行った授業実践により、基礎的・基本的な知識の習得を図ることができたと判断できる。これは、実践課題研究の成果であり、研究目的を概ね達成することができたと考える。一方で課題としては、「Connections フェーズ」において、学習内容との関連を促す生徒へのフィードバックができなかったことなどがある。

5. 研究の成果

筆者の行った教育実践課題研究は、基本学校実習Ⅱと発展課題実習Ⅰ・Ⅱの成果・課題を踏まえ、「教えて考えさせる授業」の「教師からの説明」、「ICE モデル」の「Connections フェーズ」を取り入れた授業案及び基礎的・基本的な歴史的事象の習得を図るための検証方法案を提示する。

授業実践の具体的な内容は、①生徒の生活及び学習内容と関係する内容を扱った導入、②図や表を駆使するとともに、生徒に伝わるような言葉を用いた個々の歴史的事象に関する説明（「教師からの説明」）、③原因と結果、結果と原因の関係性を的確に把握することを通じて、個々の歴史的事象を関連付け、特徴・特色を見出すための指導や働きかけ（「Connections フェーズ」）である。

そして、高校日本史における基礎的・基本的な歴史的事象の習得を図るための検証方法案としては、発展課題実習Ⅱで筆者が行ったような個々の歴史的事象を問うもの、複数の歴史的事象を用いて原因と結果のある問いについて考えさせるものなどがある。